Ⅰ．沿　　革

当センターの地すべり研究のルーツは，昭和44年に発足した理学部附属地盤災害研究施設（地すべり研究部門）にまでさかのぼる。この研究施設自体が昭和39年の新潟地震災害，昭和42年の羽越豪雨災害をきっかけとして，災害の研究を目的としてつくられたものである。とくに地すべりをとりあげたのは，新潟県下で毎年多発し，数も全国一という地域的特性を考慮したからにほかならない。

教官３名，技官１名で発足した同施設は，主に地質学研究者が中心となって，主として，発生した地すべり災害の調査と，地すべり地の縮尺１：5000スケールの地形，地質調査（電気探査を含む）が行われた。前者としては，昭和48年の新井市濁川地すべり（死者３名）や，昭和52年の粟島の海底地すべりなどがあげられる。後者の調査は，新潟県の強い要望もあり，受託研究という形で実施され，毎年３～４ヵ所の，とくに危険度の高い地すべり地において調査が行われ，表層地質図が作られた。

この調査は，それまでの地質図に地すべり地をおとして，分布を論ずるというやり方から，地形(斜面)発達史の観点から地すべりの危険度を予測するという，現在の手法の基礎になったものである。

そして，これらの成果は，地盤災害研究施設研究年報に記述されるとともに，学会等でも，主として，地すべりの発達史という見方で発表されてきた。この考え方は，国土地理院の刊行物にも引用されている。

当センターが発足してから，地すべりの研究は主として地盤災害研究部門が中心になって進められてきた。とくに，昭和50年代半ばには，２～３年続きの豪雪によって，地すべりや崩壊が多発した。いわゆる融雪地すべりの発生メカニズムは，観測の困難さから，まだよくわかっていなかった。さらに，地すべり危険地に指定されていない所でも地すべりが多発した。一方，この頃から県下で，消雪のための地下水の揚水による地盤沈下問題も緊急課題となった。この点を考慮して，地すべり研究分野を新設し，青木滋教授が，地盤災害研究分野より移動し，専任の研究にたずさわることになった。

地すべり研究は，後で述べるように，総合的な研究を特色としているので，地すべり研究分野廃止後でも，土砂災害研究（雪泥流も含む）を対象として，他の研究分野との共同研究という形で，研究が進められている。